

ボン、ミュンヘン

加藤 紫苑

せっかくドイツにいるので研究室の『紀要』にドイツでの生活について書いてはどうか、と勧められたので筆をとってみたものの、この『紀要』なるものがやっかいです。「研究報告」や「論文」に並んで、私のドイツ暮らしの報告というのは場違いな気がして、なにを書いたらよいかさっぱりわかりません。そのようなわけでもあまり気負わず、ドイツで暮らしている雰囲気伝わればいい、というぐらいの簡単な報告になると思います（したがってドイツに行ったことがある人には冗長であり、ドイツでの最新の研究事情に関心がある方には肩透かしをくらすことになるでしょう）。

ところで今これを書いているのはミュンヘン中央駅の寒風吹きすさぶホームです。12月8日、9日とミュンヘン哲学学院（Munich School of Philosophy）で「大陸実在論 Continental Realism」と題するカンファレンスが行われたので、様子をうかがってきました。レイ・ブラシエ、マルクス・ガブリエルをはじめとして現代の大陸哲学の実在論的な立場を代表する哲学者10人が登壇したものの一般の参加者が私も含め30人ほどと、想像よりこぢんまりとしたカンファレンスでした。一般向けというよりは、登壇者同士の意見交換に重きが置かれている印象でしたが、「思弁的実在論」の登場から十年の節目ということもあって充実した内容の会でした（ただ私が目当てにしていたシェリング研究者のイアン・ハミルトン・グラントの発表がキャンセルだったのは残念でした）。二日間の日程を終えて帰ろうとしたところ大雪のため飛行機が欠航になり、急遽鉄道を利用しなければならなくなったのですが、目的の列車は170分遅れとなっています。手がかじかんでうまく字が書けません。明日の授業までに私は無事自宅にたどりつけるのでしょうか。

今はミュンヘンにいますが、私が住んでいるのはボンです。今年の9月からライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン（ボン大学）の、マルクス・ガブリエル教授のところに留学しています。ガブリエル氏は「認識論、近現代の哲学」担当の教授ですが、それ以外にも幅広い分野に関心を持ち、近年は「新実在論」という独自の立場から現代哲学の諸問題について積極的に発言しています。私が先生と初めてお話したのは2015年の12月に来日されたときで、その際に留学を勧めていただきました。ガブリエル氏はもともとシェリング研究者でもあるので、私がシェリング哲学の研究を進めるのによい環境であろうとのことでした。お会いしてからだいぶ経ってから留学の受け入れをお願いしたので、私のことなど忘れていただろうと思っていたのですが、「覚えているよ」という旨の返事を（実際に覚えていたのかはわかりませんが）先生からいただけてうれしかったです。ボンに到着して早々、最初に面談したときもあれこれ気遣ってくださり、細やかな心配りを感じました。「ドイツ語があまりできなくて」と私が情けないことを言ってしまうと、「この本を読んで、授業に出て勉強すればいいよ」と著書（後述の *Die Erkenntnis der Welt*）をくださり、励ましてくださいました。先生の研究室がある建物の中を案内してもらい、1階にヘーゲル、2階にフィヒテとシェリングの胸像がある、なんていう話もしました。ガブリエル氏の人物評として、「とても気さ

くでいい人」と「たいへん厳しい人」という大きく分けて二通りを聞いたことがあります。個人的な感想としてはどちらもあてはまると思います（これについては京都にいたころに「F先生って優しそうでいいですね」と「F先生はすごく厳しいけどうまくやれている？」と同じようなことをよく言われていたのを思い出しました。哲学の先生たちはみなさんそんな感じなのでしょう。余談ですが、ガブリエル先生とF先生の共通点を考えたとき一番に思いついたのは、私にはまったくわからない法則に基づいて研究室に本が積んであるところ（です）。

ガブリエル氏の研究室は、彼が主催している「国際哲学センター（Internationales Zentrum für Philosophie NRW）」（写真参照）にあります。「国際哲学センター」は大学から歩いて5分ほど離れたポッパードルファー通りにあり、黄土色の古めかしい外観をした、気取らない落ち着いた雰囲気のある建物です。内装は新しく、エレベーター付きの三階建てです。先生方の研究室の他にセミナー室があり、ここでコロキウム（いわゆるゼミ）が開講されています。コロキウムは15人から20人程度の大学院生（他大学の学生や留学生を含む）が参加しており、大学院生の研究内容は、カント、シェリング、ヘーゲル、ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、デリダ、プラトン、ダントーなど多岐にわたります。それに応じて、コロキウムでの議論もドイツの古典哲学に限らず、（いわゆる分析哲学的な主題も含めて）さまざまな哲学的問題が話題になります。コロキウムでは学生の発表だけでなく、ガブリエル氏の依頼に基づいてそれ以外の方々の講演や発表も行われます。またコロキウム以外に、「国際哲学センター」が主催する企画でも頻繁に研究発表が行われています。最近ではグレアム・プリースト（かわいい猫のTシャツを着ていました。ドイツの教授たちはだいたいスーツ姿なので新鮮です）の講演がありましたし、11月に2日間わたって開催されたシンポジウム“Kategorienduktion in der Klassischen Deutschen Philosophie”（ドイツ古典哲学におけるカテゴリーの演繹）ではドイツ各地の研究者が集まり、議論を交わしました。

2017/18年の冬学期にガブリエル氏がコロキウムのほかに担当している授業は、認識論の講義と芸術哲学の演習（ともに学部生向け）、ヘーゲルの『精神現象学』の演習（大学院向け）です。認識論の講義（認識論入門）は彼の著書 *Die Erkenntnis der Welt: Eine Einführung in die Erkenntnistheorie*（『世界の認識：認識論入門』2016年、邦訳なし）を下敷きにしています。また『精神現象学』の演習は、マイケル・フォースター教授との対話形式で進められます。出張や体調不良などでガブリエル氏が授業できないときは、前二つの授業は同僚のロメツチュ氏がかわりに担当し、後者はフォースター氏が一人で読み進めます。なので、ガブリエル氏が休んでも休講にはならないようになっています。

授業に出たり、自分の研究をしたり（しなかったり）、京都にいたころと大学での生活自体はあまり変わりません。ただドイツに来たのは初めてで、外国で暮らすのも初めてなので、いろいろと戸惑うことも多いです。缶切りが見たことのない形状をしている、横断歩道の白線が少ない、事務手続きがよくわからないなど、あらゆることが気がかりで、一つ解決するとまた次の問題が出現するといった具合です。今もうまくやっているとはいいいがたいですが、なんとかボンで暮らしています。ボンはドイツ南西部、ライン川中流に位置する人口31万人の都市です。大学からすぐそばにライ

ボン、ミュンヘン

ン川が流れているのでよく川沿いを散歩します。都会ではありませんが、しかし生活に困るほど田舎ということもありません。ミュンヘンも素敵な街だと思います。ミュンヘンの街を歩いていると、自分のイメージしていた「ドイツ」にいるという実感がわきました。これはケルンやボンでは感じたことのない気分で、バイエルン州がいわゆるドイツのイメージを代表するといわれているのも納得しました。大きい街なのに、東京やパリとはちがう静けさが満ちているようで好きです。ベルリンに行けばベルリンを気に入るかもしれません。実際のところどこでもいいのかもしれません。今朝まではこの報告を「ミュンヘンはよいところでした」で締めくくることになっていたのですが、寒さと眠気でミュンヘンの記憶が薄れていって、よくわからなくなってきました。

170分遅れの列車は結局運休になり、遅延と乗り換えを繰り返しミュンヘンから13時間かけてボンまで戻ってきました。朝6時のボン中央駅は、ほとんど明かりもなく静かです。そろそろ市場が開き始め、街も騒がしくなってくるころです。



国際哲学センター入口



ミュンヘンのシェリング通り